

Kappa Books



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。なお、このほか、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もし、お気づきの点がありましたら、お手紙に、あわせてお教えください。お手紙に、は、ご職業や年齢なども書き添えて、くだされませんか。

東京都文京区音羽二

光文社

神吉晴夫

埼玉県立熊谷

昭和46.10.11 受入

図書館蔵書

かあちゃんといふ人のも 日本一幸せな母親の記録

昭和41年2月25日 初版発行
昭和45年1月25日 33版発行

検印廃止 ￥300

著者 吉田とら
静岡県田方郡土肥町大久保

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽 2 株式会社 光文社
振替東京 115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Tora Yosida 1966

KAPPA BOOKS



かあちゃんと11人の子ども

日本一幸せな母親の記録

よしだ
吉田とら

光文社

カッパ・ブックス

ま え が き

十一人兄弟の末っ子都が、高校一年のときに書いた詩「かあちゃん」は、旺文社主催の第八回全国学芸コンクールで最優秀作に選ばれ、総理大臣賞をもらいました。このかあちゃんに、光文社から子育ての記録を書いてほしいとのたつての依頼があり、その熱意に負けて書きつづったのがこの本です。そこで、かあちゃんごろうさまでしたという意味で、子どもたち全員がそれぞれの思いで、リレー式にまえがきを書くことになりました。

——長男・聖

二十数年まえのこと、うちの両親はお風呂もいっしょだよといったら、村の人が笑ったのでおどろきました。夫婦の口争いは一度もきいたことがありません。子どもたちはひまさえあれば両親のもとへ帰ってきます。どちらかというところ、とうちゃんのほうが子どもを待つようです。子どもとしても、父母の喜ぶ姿はなにより美しく心にうつります。旅行もしたがりません。伊豆が世界一美しく、心暖まる所だから。こんな故郷や両親にめぐまれた子どもたちは、いつも感謝の

気持ちでいっぱいです。

——長女・成子なるこ

私も二児の母となりましたが、子どもが病気の時など看病で眠れない夜がつづく、という
らめしく思ったりします。そんなとき、十一人もの子どもを無病息災に、しかも平等に愛情をか
けて育ててくれたかあちゃんの労苦は、いかほどだったろうかとしのばれます。どんなにつかれ
ても、際限のない子どもたちの要求を十分に満たしてくれたかあちゃん。露ほども苦勞を顔に出さず、
いつもにこにこしているかあちゃん。けっして子どもをしかったり、お灸きゅうをすえたりしなかつた
かあちゃん。そんな母親にならねばと自らみずかを励まします。

——次女・旭子あさこ

干支えとはその人の性格をあらわすとか。十一人兄弟姉妹で十一支、うさぎだけたりなかったが、
「満つれば欠くるが世のならい」というから、ぜんぶそろわなくてちょうどよかったかな。それ
ぞれの顔と性格をもつ十一人だけれど、家を思い親を思う心は、みんな同じです。男の兄弟六人
が集まって酒をのむのは年に二、三度。いろりをかこみ、かあちゃんの漫談を肴さかなに夜のふけるの
も忘れてのむのは、何にもかえがたい楽しいひとときです。

——次男・将^{すすむ}

「近ごろの子どもは口ばかり達者で。」と親はいうけれど、その親こそ子どもの手本ではないでしょう。教師生活九年め、いろいろな子どもや家庭をみてきましたが、かあちゃんのいう「子は親の鏡」のいかに的を射ていることか。私には三歳一カ月の子どもがありますが、このわが子の一杯の要求さえ、ときには面倒に思う自分をかえりみて、なにごととも子ども本位に身を惜しまなかったかあちゃんに、学ぶことのなんと多いことか、いまさらながら痛感します。

——三女・京子^{きょうこ}

四年間に百五十通。教員として一人北海道へ赴任^{ふにん}した私に送られた、かあちゃんの手紙の数です。かぞえきれないほどの箱づめのみかんも、海を渡って届けられました。とうちゃんとともに田畑をたがやし、乳牛を飼い、二人の孫を預かり、大学へ三人、高校へ一人と仕送りして学ばせていたかあちゃんからであることを思うと、遠く離れて人一倍心配をかけている自分は、ただただ、その愛情の深さに、強さに、心をうたれるのです。

——四女・文子^{あやこ}

社会へ出て三年め。たったひとりしかえらべないとなると、嫁さん捜しはちと面倒で、拝啓かあちゃん様とご高見をお伺いすることと相成ります。いつまでもご心配をおかけして申しわけありません。かあちゃんはこんなことをよくいいます。「アンボウ(厚)や、女は男の器量しだいな、ぐずにもなればまめにもなるだよ。とうちゃんが「機転丸」をトラック一台分ものませたいというほどぼんくらなおらが、子どもを人なみに育てられたのは、みんなとうちゃんのおかげだよ。」と。

——三男・厚あつし

大学の入学試験のとき、「かあちゃんは合格を神仏に祈っています。」と手紙をくれました。以来四年間苦勞のかけっぱなしで卒業です。一月十日卒論締め切り日午前四時、かあちゃんが静かに二階に上がってきました。やっぱり寝ずにいたのです。こうして心配をかけてはかあちゃんひとすじの寿命を縮めてしまうのです。この本は、ぐちひとつこぼしたことのないかあちゃんの子育て一筋四十一年の記録。かあちゃんひとすじのほんとうの声がさけるようにと、子どもたちは執筆ちゅう干渉しないよう申し合わせました。

——四男・治おさむ

私たちの両親は、子どもたち全員に大学の教育を受けさせることが念願でした。それには、国立コースをえらばなければならぬのが私たちの課題です。すべりどめの私大が合格しても、だれ一人、猫がくしゃみをしたほども意に介しません。敵は本能寺にあり。しかも浪人はゆるされません。おあとがつかえているからです。しかし、合格したときの両親の喜ぶ姿が、すべての苦しみを一瞬のうちに忘れさせます。来年、末っ子の都が首尾よく国立大学へはいれば、両親の教育計画もようやくゴールに近づくのです。

——五男・俊たかし

とうちゃんは個性の強い人間。無限に角かどがあつて円にならない男です。けっして妥協しない頑固な一匹狼です。この頑固さで自分にうち勝つて、子どもの教育にうちこんできたのだと思います。かあちゃんの柔ととうちゃんの剛とがうまく溶け合つて、家庭にはなんの波乱も起こりませんでした。大学の受験のとき、めったに手紙をくれないとうちゃんが葉書をくれました。「むりをしないです。やりなさい。」と。これを試験の当日胸のポケットに入れてお守りにしたことをおぼえています。

——六男・耕つとむ

三島^{みしま}の高校に入学して親もとを離れ、はじめて親のありがたさを感じました。入学後一、二週間は寝てもさめても思うのは家のことばかり。古い日記帳を開いてはさびしい気持ちをなぐさめていました。風呂の火を燃やしながら、たくあんを漬けながら語ってくれたかあちゃんのことを、あらためてかみしめました。これらを自分の心の宝として残したいと思い、一年生の夏休みにまとめたのが、詩「かあちゃん」です。

かあちゃん、ほんとにごくろうさまでした。これからも体につけていつまでも長生きしてくださいね。

——五女・都^{みやこ}

昭和四十一年二月十日

目次

まえがき

3

第一部 村でいちばん若い嫁

——大正十四年～昭和十一年

11

第二部 静かな村にも戦争が

——昭和十二年～昭和二十年

55

第三部 かあちゃんは幸せだよ

——昭和二十一年～昭和四十一年

123

カメラ

荒井英一郎・沢渡 朔

○本書の性質上、文章はすべて原文のままである。
ただし、「かなづかい」は現代かなづかいに統一、
明らかな誤字、脱字のみ訂正した。

○傍点および（ ）内の小活字は、すべてカッパ・
ブックス編集部が、本文中の静岡地方の方言など
について、読者の理解を助けるため、付加、挿入
したものである。

○本書に収録した詩「かあちゃん」は、旺文社のご
好意により、「高一時代」昭和四十年二月号より
転載させていただいた。

第一部 村でいちばん若い嫁

——大正十四年～昭和十一年

わが大久保^{おおくぼ}部落は、静岡県伊豆^{いず}半島の西海岸にあります。国鉄沼津^{ぬまつ}駅から船で二時間。紺碧^{こんぺき}の駿河湾^{するが}を前庭に、背後に天城^{あまぎ}の連山、そして眼前に霊峰富士の山をおぐ絶景の地にあります。部落の戸数は五十五戸、吉田家は「西豆^{さいず}海岸段丘」なる高台に位します。とうちゃんの名は貞治^{さだはる}、かあちゃんはとら、この夫婦は、十一人の子宝にめぐまれました。父母はわずかな田畑と酪農により、四十余年の風雪にたえ、昭和初期の不景気、みじめだった戦中、戦後を、十一人の子どもをりっぱに育てあげました。

(長男・聖^{さとし})

昭和三十九年の秋のこと、ちょうどその日は十一月二十三日、勤労感謝の日で、秋晴れの暖かい日だったよ。孫の有人^{ありと}をおんぶして、おとうちゃんと三人でさつまいも掘りに畑に出ていた。

お昼すぎに、長男の聖^{さとし}が手伝いにきた。くるが早いかな、

「おかあちゃん、いまミーコ^{みよこ}（末っ子の都のこと）が学校から帰ってきての話だが、おかあちゃんのことを詩に書いて出したら、それが総理大臣賞をもらうことになったということだよ。」といった。

「まあ、そりゃあほんとだかい。」

「ああ、ほんとすら、三島の北高へ間合わせがあったというから。」

「まあ、ほんととしたら、ミーコでっかいことやってくれたもんだなあ。まあ、おとうちゃんどうすら、ミーコが総理大臣賞をもらうことになるだってよ。」

「ほおう、そうか。ミーコのことだからなあ。」と、おとうちゃんはにっこり笑って、鍬^{くわ}を振り上げた手を休めた。

まあ、一服しようじゃあ、お茶でも飲んでとみんなで土の上にとっかと腰をおろして、とにかく喜びあった。

それじゃあ、早じまいして帰ろうと、おとうちゃんがいった。掘り出したいものを耕耘機^{こううんき}に積みこんで、うちに帰った。

都は、お勝手にさあざあと洗いのものをして夕飯のしたくにかかるところだった。

「どうだいミーコ、たいへんでっかいほうびをもらうことだって、サト兄^{にい}(聖)からきいたよ。よかったなあ、おめでとう。」といった。都はいつもの調子でへへーんといいながら、にっこり笑っていた。さすがにうれしそうだった。それじゃあとにかく今夜は前祝いをやろうじゃあと聖がいう。おとうちゃんは、これがほんとの勤労感謝だなといいながらビールをのみ、みんなで楽しく夕飯をすませた。

あまりのうれしさに、すぐに同じ部落にある実家の姉のところへとんで行って、このことを知らせて喜んでもらおうかと思って、一足、門口まで出かけたが、ふと考えなおした。あわてるでない、いま少し待ってみよう。旺文社からたしかの知らせのあるまで待とう。そのとき知らせたほうが安全だと思った。はっきりしたことをきかないであわてんぼうして、子どもにもしや恥をかかせるようなことがあってはいけないと思いついて、そのときはやめた。

それから毎日楽しみにあふれながら、おとうちゃんとさつま掘りをつづけた。

そんな毎日をつづけているうちに、十二月十八日に、都の出品したかあちゃんの詩が第一位に入賞したのでお知らせする、授賞の日は一月十五日、成人の日ときまった、と知らせてくださった。おとうちゃんが、

「おかあちゃん、こんどはだいじょうぶだよ。ほんとうのかたい知らせがきたよ。」といった。

「まあ、そうかい、そりゃあよかった。これじゃあ、安心して姉に知らせにいったってこようかな。」と、さっそくすっとなでいった。

「姉さん、きょうは、ミーコが旺文社主催の学芸コンクールに詩を書いて出したところ一等になって、来年の一月十五日にほうびをくれるから、という手紙がきたんで、いそいで知らせにきたよ。ミーコが生まれたときから、小学校にあがるようになり、また中学校へかよっているあいだ、えらいお世話になって、そのおかげでこの日を得て、なんとお礼をいっていいのかわからないのだよ。ほんとに、ミーコは幸せな子だよ。ありがとうさんよ。こんなことがあるなんて、おらあ、夢にも思っではいなかった。ほんとに、これは、おらたち親子だけでもらったほうびじゃない。親せき、兄、姉、また教えてくださった先生がた、ミーコをとりまいてくれるあまたのお友だち、近所のかたがた、かぞえきれないみなさんのおかげだよ。」と、おらはいった。

姉も涙をふきながら、喜んでくれた。

「おまえが、いっしょうけんめいころげまわって働き、なんぎも苦にもせず、すごしてきた、そのめぐみがまわってきただよ。」といって、ともに喜びあった。

それから、昭和四十年一月十五日、成人の日に、いよいよ東京で賞をいただくことになった。授賞式には、かあちゃんまでお招きを受けて、まことにもったいないかぎりのことだった。いかにしても、こんな田舎者では、えらいかたがたのおいでになる会場で、どうしてそれがつとま